

ドクター メモ

感染症検査について

検査の偽陰性と偽陽性

感染症を診断するには検査が必要です。感染症検査には「抗原検査」と「抗体検査」があります。感染症を引き起こす病原体そのものを「抗原」といい、抗体が私たちの体に侵入してくると、その抗原を撃退するために「抗体」というタンパク質を産み出します。抗原を検出するための検査が抗原検査で、抗体を検出するための検査が抗体検査です。抗原検査は、病原体そのものを捉える検査のため、現在感染しているかどうかの判定に用いられます。また、抗体検査は、感染した後に体が産み出したタンパク質を捉える検査のため、過去にその病原体に感染したかどうかの判定に用いられます。

抗原検査には病原体のタンパク質を捉える検査（インフルエENZA検査など）、病原体の遺伝子を人工的に増幅させて捉えるPCR検査があります。検査の病原体を検出する能力

を「感度」といいますが、病原体を人工的に増やす分だけPCR検査の方が感度は高くなります。検査では陽性と判定されるべきところを陰性と誤って判定される偽陰性と陰性と判定されるところが陽性と誤って判定される偽陽性があります。感度が低い検査なら病原体が体の中に侵入していても、その病原体の量が少なければ陰性と判定してしまい偽陰性となってしまいます。実際、新型コロナウイルス感染症検査におけるPCR検査の感度はそれほど高くないので偽陰性が多く、陰性の判定が難しいのが現状です。このため、陰性と判定されても、感染している可能性があるの、医師の意見を聞き適切な行動をとるなど、感染症検査の性質をよく理解して判定結果を解釈することが重要です。